

自由と他由の自在性

○上出 寛子 (名大)

Instruction for SICE SI2019 Annual Conference Manuscript

○Hiroko KAMIDE (Nagoya University)

Abstract: This paper introduces philosophy in the teaching of Buddha about the flexible mind reporting on the idea of transcending the contradiction between self-dependence and dependence on others to a higher dimension. If the mind is flexible, contradictions do not remain in conflict, but can be resolved by introducing a higher perspective. The existence of self is considered from both self-dependence and dependence on others. This paper discusses that the integration of the two does not simply mean interdependence, but that thorough perfect self-pursuit and dependence on others merge together as a phenomenon through a process.

1. 柔軟心（にゅうなんしん）

“自”に由って存在するのか、“他”によって存在するのか、そのいずれかしか取らないということをしてない、という自在性を身につける上で、心の柔軟性は欠かせないものである。柔軟性は、物理的構造物にのみ存在するものではなく、当然のことながら、一人の人間として、あるいは研究者として、人の心にとっても重要な概念なのである。「正法念処經(しょうぼうねんしょきょう)」の巻第 61、観天品之第 40 中の中には、次のような「偈(げ：歌のこと)」がある[1]。

若し人にして心柔軟ならんには
けだし、よく鍊れる金の如し
この人内外よく
速やかに衆苦を脱することを得ん
若し人にして心器調わば
一切皆柔軟にして
この人善種を生ぜんこと
けだし良き稲田の如くならん

自我にも、物にも、こだわらず、現象をあるがままに見通し切ることが、技術開発における重大な発見に重要となるが、そのようなあるがままを受け入れられる柔らかな姿勢のことを、仏教では柔軟心（にゅうなんしん）という。さらにいうと、こだわらない、ということにさえもこだわらない。この自在性は柔軟心をもって実現できるものとも言える。この偈にあるように、心が柔軟であれば、あらゆる苦難は解決し、より良い方向へと進んでいくことができるのである。わたしたちは意識的にも無意識的にも、自分の専門や関心といったフィルターを通して現象を見ていることが多いが、そのようなフィルターを排し、対象を無心に、しかも対象として見ない見方で観察すると、突如、向こうからアイデ

アがやってくる、という体験につながることもある。

2. 自由と他由の合一

以上のような柔軟心を持っていると、一見、相反する矛盾するもの同士が、一つ上の次元で表裏一体として合一することに気がつくことがある。自由と他由も表裏一体である。自由とは「自らによる」であり、他由は「他による」という説がある[2]。このことを、外界と自己との関係に焦点を当てて考えると、「自らによる」とは、自己が前に出て対象と関わっているというあり方であり、一方で「他による」とは、周囲があつてこそ自己が成り立っているというあり方である。注意すべき点は、自由と他由が合一するとは、自と他が相互依存的であるという意味ではないということである。自と他が相互に依存するということは、すなわち自とも他とも同じ次元での解釈であり、一つ上の次元へ超越した合一ではない。自由は徹底的に自己を推し進め、主体性を確立することであり、他由は完全に他へ任せ切るという主体性の放棄である。ではこの二つが合一するとは何を意味するのか。

[3]では、主体性の確立を「ミズカラ」、自己の計らいを放棄した自然体を「オノズカラ」として定義している。本稿における自由は前者、他由を後者として位置付けることとする。ミズカラである自由という精神状態の場合には、主体性が時に悪に転じ、エゴとして作用することもあるが、自己の活性力が十分に高くなるとエゴは消え去り、自他が合一するとされている。またオノズカラである他由では、自分がするという計らいが消えており、大自然に溶け込んだ完全な自己滅却の状態とされている。この自己放棄は、実はミズカラ進んで無条件降伏するということであり、オノズカラはミズカラの確立によるものである。また、オノズカラとは自然と個々がハタラキを全うする現象であり、この点におい

て実はミズカラの機能の発現に繋がっているのである。すなわち、ベクトルの異なる自由と他由、あるいはミズカラとオノズカラは、そのままでは矛盾するもの同士であるが、徹底的に実践するというプロセスという視点を入れることで、矛盾なく成立するということが合一なのである。二元論的に矛盾することは、二元論の世界では対立するしかないが、実践の場においては言語を超えて合一する。これが、前記した、自我にも、物にも、こだわらず、現象をあるがままに見通し切ること、となるのである。

3. モノと人間を自由と他由で考える

わたしたちが日常的に関わっているモノと人間の関係も、このような自由と他由の合一という視点で考えることができる。モノがますます便利になり、モノで溢れかえっている現代においては、地球環境保護や資源枯渇問題が深刻になっているが、自由と他由が合一するという視点を導入することで、個々人が日常生活でどのように実践すればよいのかについて、微力ながら考察できるのではないかと考えられる。

[4]では、モノと人間に関わり関して、モノに対する作法を心理学的に評価した。その結果、モノに対する作法には、モノを丁寧に扱いきちんと整理整頓するという人からモノへのアプローチだけではなく、モノを大事にすることを通して、モノや他者への礼儀を学び、自心が身につくという気づき、すなわちモノから人への学習が含まれることが明らかとなった。人からモノへの作法とは、まさに自由（ミズカラ）という精神状態である。また、モノから人へもたらされる学習に気がつくということは、モノに由りて新たな自己成長が実現されるという意味で、他由（オノズカラ）と関連する。

また、[5]では、そのような作法が整っている人は、自分とモノとの一体感を高く感じること、また、モノを擬人化しやすいことも確認された。モノとの一体感が高いということは、徹底してミズカラを実践する姿勢により、モノと自己との境界線が消えた状態である。また、モノを擬人化するということは、自分がモノを操作するというよりも、モノが働くままに任せる、というオノズカラに関連するのかもしれない。以上の解釈は現時点では単なる直感的仮説であり、今後検証が必要である。さらに重要な点として、このようにモノに対して作法を持って関わろうとする姿勢が、他の様々なモノに対しても普遍化し、よりたくさんを望む欲望の爆発を制御し、自然と調和したライフスタイルへと繋がっていく可能性を探ることである。

法句經に以下の言葉がある[6]。

無病は最上の利にして、満足は最上の財産なり。
信頼は最上の親族にして、涅槃は最上の安楽なり。

現代では、満足すればするほどさらに多くの、上質な物を求め、それこそが目指すべき人類の発展であるかのような風潮である。満足を外だけに求めてはいけないと筆者は思う。もちろん贅沢や名誉を追求することが全面的に悪いというのではない。むしろそれらを禁じるのではなく、外へそれらを求めるエネルギーを、自分の内側に向けることを忘れていることが問題なのである。今後の展開として、仏教における教理を現代に置き換えながら、実証的アプローチと組み合わせ、議論を行っていく。

参考文献

- [1] 森政弘(2013)仏教新論 佼成出版社
- [2] 越田陽子(1980)他由の自在, 第6章, pp. 100-111. 自在学研究所(編)自在入門 開発社
- [3] 森政弘(1989)矛盾を活かす超發送 講談社
- [4] 上出寛子, 新井健生, 2017, ロボット考学とモノに対する作法, 第35回日本ロボット学会学術講演会, 3B2-01.
- [5] 上出寛子, 新井健生, 2019, モノと人の間ではたらく循環と調和, 第37回日本ロボット学会学術講演会, 2C1-01.
- [6] 平川彰(1982)般若心境の新解釈 世界聖典刊行協会